

序章. ビジネスの世界から浮かび上がったこと

日本の産業界は、1950年代の石炭から石油へのエネルギー転換や1960年の日米安全保障条約改定などを経て、高度成長の軌道に乗った。私が大学を卒業して社会人となり、産業界に身を置いたのは高度成長の初期とも言える1965年のことだった。それから28年の間、鉄鋼および大型機械の生産に携わる大手企業で働いてきた。

工学部の出身だった私は、金属加工機械の設計部に所属していた。しかし、設計の仕事だけに取り組んでいればよいという訳ではなかった。営業活動にも深く関わり、顧客の工場での設置工事や試運転にも関わった。トラブル、不具合、クレームなどが発生すれば引っ張り出される立場にもあった。

こうした28年の間に、様々な人々、様々な物事、様々な場、様々な瞬間、様々なやり方、様々な現象、といったものに触れてきた。そして様々なことを感じ、様々なことを考え、様々な行動を取ってきた。その中には、好ましいこともあれば、嫌なこともあった。成功して喜んだこともあれば、失敗に悩み苦しんだこともあった。

機械の設計という分野は、大方は論理的思考、科学的思考の下で動いている世界だ。もちろん人間関係や権力関係が支配する部分もあるが、それは業務環境の主要な部分を占めている訳ではない。しかし、営業活動や設置工事となると、論理的思考や科学的思考を外して考えなければならない領域が広がる。

この経験を多く積んだことが、物事を見る私の視野を広げたと言えるだろう。特に、クレーム対応から得たものはきわめて大きかったと感じている。私はその中から、人間の心理や感情にまで入り込む必要性を学んだのだ。

クレーム対応の経験を重ねるうちに、私は独学で心理学を学び始めた。その過程でユングを知り、河合隼雄を知った。河合隼雄の著書を通して現象学を知り、この世界に踏み込むことになった。

現代思想の研究者とは違い、技術者として仕事をしながら独学するという環境下では、フッサールやメルロ＝ポンティの著書、ユングや河合隼雄の著書を詳細に読むことはかなわない。河合隼雄の著書やユングの翻訳書の一部、著名な学者のユング心理学や現象学に関する解説書を読み漁って、そういったものを理解することに努めた。

ユング心理学と現象学を学び始めたことが、以後の私の知識の拡大や知性の充実を促すことになり、色々な近代思想に触れる道を開いてくれた。ユングの心理学と

現象学は私の思考回路に大きな影響を与えた訳だ。影響の大きかったものの幾つかを拾い上げてみよう。

- ・人間の心には意識の領域と無意識の領域とがある。無意識の領域は意識の領域よりはるかに大きい。
- ・人間の行動は無意識に支配されているものが圧倒的に多い。
- ・無意識の領域に在るものが意識の領域に流れ出すタイミングがある。
- ・一切の先入見を排して事象そのものに迫ろうとする態度、即ち、概念や思弁をもてあそぶことなく、常に事象そのものに密着しようとする姿勢を保つ。
- ・何らかのかたちに体系化された世界の中で現象を解釈するのではなく、生きている自分が直接経験できる世界の中で現象に向き合う。
- ・認識作用に先立つ知覚経験においても意味は産出される。この意味は意味付与という能動的なものではなく、意味発生という受動的なものである。こうした知覚経験のできる世界こそあらゆる意味発生の基盤となっている。

人間の心と行動の在り方や、真理を探求する態度に対するこうした捉え方の影響が、私が生きていたビジネスの世界で直接向き合うことのできた事象に重なり、私の思考と行動に進歩と変革をもたらしたのだらうと受け止めている。

28年間の企業勤務の後に私は独立し、主に中小企業を対象に開発、営業、設計、間接部門などの生産性や業務品質を高めるための支援活動を行ってきた。その間も事象に向き合う姿勢は変わらず、研鑽を重ねることができたと思っている。

以下にお伝えすることは、こうしたことを基盤に置いて生まれてきた「思考と行動に関する一つの思想」だ。400年以上にわたって発展を遂げてきた「西欧近代主義」の一つの到達点が、現代のビジネスの世界であると受け止めれば、客体的・客観的世界観を中心軸に据えて発展してきた「西欧近代主義」の地平を目指すに際して、この思想が力になる場面があるのだらうと信じている。